



洋上アルプス

No.247 平成27年10月5日

発行
林野庁屋久島森林生態系保全センター



バックナンバーや屋久島国有林における入林許可申請等様式のダウンロードはこちらにあります

http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/yakusima_hozen_c/



鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦1577-1

TEL0997-42-0331 FAX0997-42-0333



平成27年度屋久島世界遺産地域連絡会議幹事会（第3回）開催!



会議の様子

平成27年度屋久島世界遺産地域連絡会議第3回幹事会が、9月16日（水）に鹿児島県庁会議室において開催されました。

主な議題として、第1回科学委員会及びヤクシカWG合同会議において各委員から指摘のあった事項について、対応が協議されました。また、科学委員会のあり方、山岳部利用のあり方について、各委員の指摘に対する対応が協議されました。

今回の協議内容をふまえ、次回の科学委員会及びヤクシカWGのスムーズな運営と指摘事項に対する各委員への事務局の対応と、今後、各委員から助言指導を頂くことの整理を行い、次回の科学委員会及びヤクシカWGの開催に向け各機関が連携して取り組むこととしました。

白谷雲水峡3団体協同で清掃ボランティア実施

9月12日（土）、（株）伊藤園7名、公益財団法人屋久島環境文化財団4名、屋久島レクリエーションの森保護管理協議会3名の総勢14名による歩道清掃のボランティア活動が行われました。

当日は、曇りで21℃と比較的過ごしやすい気候の中、白谷雲水峡の入口小道（階段）から憩いの大岩手前の橋の間を清掃、作業はスムーズに進み無事終了しました。清掃後の園内は見違えるほどきれいになりました。



記念碑を囲むボランティアの皆さん

ありがとうございました。



階段を清掃する皆さん

保全センターの人の動き

10月1日付け転入

自然再生指導官

永山 博美(技術普及課 企画係長)

白谷雲水峡二代大杉の樹勢回復事業を実施

屋久島レクリエーションの森保護管理協議会は、平成26年度事業で二代大杉の樹勢回復事業を実施しました。

- ・根系の踏圧を防ぐ歩道の新設（迂回路2）
- ・利用者の混雑緩和のための迂回路と展望デッキの設置（迂回路1と木道⑨）
- ・既存歩道の土砂流失防止のための階段・丸棒柵を設置

また樹勢回復措置として、土壌改良を既存歩道上に8地域に施し、それぞれDOパイプ、改良土、ヤシマットを設置し、ココピート、バーミキュライトの土壌改良剤の散布を行いました。



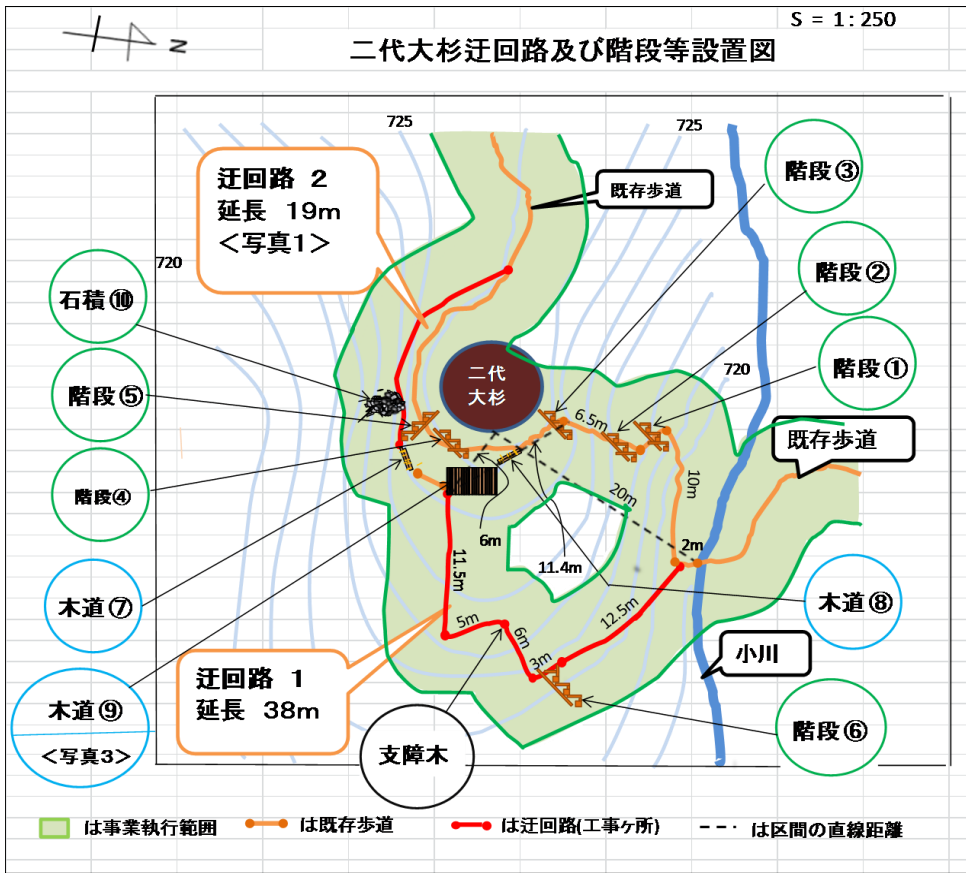
<写真1> 迂回路2



<写真2> 既存歩道



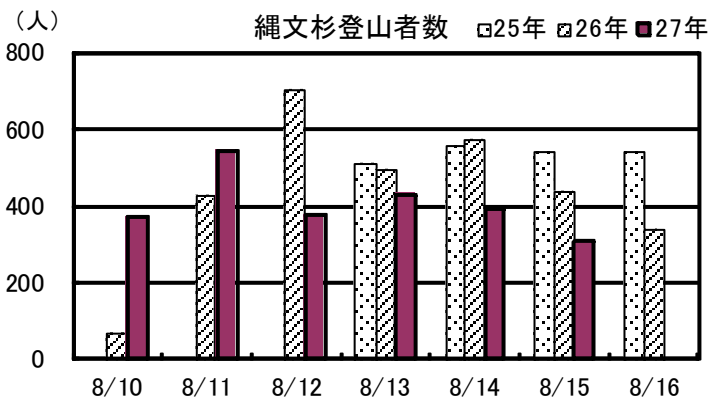
<写真3> 展望デッキ(木道⑨)



夏休み 縄文杉登山者数 (平成25年~27年)

	縄文杉			
	25年	26年	27年	前年比
8月10日	—	71	373	302
8月11日	—	425	542	117
8月12日	—	705	375	-330
8月13日	511	494	428	-66
8月14日	556	573	391	-182
8月15日	543	440	311	-129
8月16日	541	346	—	—
合計	2,151	3,054	2,420	
日平均	537.8	436.3	403.3	—

*25年度は4日間、26年度は7日間、27年度は6日間の合計及び平均。



* 日曜日
* 屋久島山岳部利用対策協議会の調査による。

1974年から1976年の夏に、多くの若手ニホンザル研究者が屋久島の西部海岸地域に集まり、一斉調査が行われました。これが、今に続く本格的な屋久島のニホンザル調査の出発点です。

当時のニホンザル研究の中心だった餌付けは、本来のニホンザルの生活をゆがめている、という反省から、餌付けや大規模な森林伐採を受けていない、ニホンザル本来の生活を見られる場所として、屋久島が注目されたのです。この調査の中心メンバーだった、当時京都大学の大学院生らが、辛抱強く追跡を続けることで、餌付けによらずサルを観察者に馴らす「人付け」を試み、成功しました。それ以来、西部林道周辺では、複数の群れのサル一頭一頭を識別し、行動を観察する調査が、40年間続いています。

西部林道での長期調査で明らかになったことの一つが、ダイナミックな社会変動です。1970年代の調査開始当初、調査対象の群れは個体数を次々に増加させ、群れの分裂が頻発しました。おそらく、この地域では、それまで行われていたサルの捕獲からの回復過程にあったのでしょう。ところが、1980年代の後半になると、調査対象の中で、個体数が減少する群れが現れ、ついには、最後に残ったメス2頭が隣接する群れに融合して消滅する事例が観察されました。母系社会であるニホンザルで群れの融合が観察されたのは、これが初めてのことです。このような事例をあわせて少なくとも5例観察されています。屋久島海岸部では、個体数がいったんある程度より小さくなると、アカンボウがほとんど生まれなくなります。そのため、数が次第に減っていき、最後には消滅してしまうようです。個体数増加が頭打ちになると、群れと群れとの競合が起こって、小さい群れが数を減らし消滅することで、全体の個体数が一定に保たれているのでしょう。

西部林道には現在もサルがいますが、それは40年前にこの場



図2 行動観察の様子

所にいた群れの子孫とは限りません。いくつかの群れは消滅し、いくつかだけが残り、数を増やせず、栄枯盛衰の結果が、今の西部林道のサルたちなのです。

(つづく)



図1 屋久島のニホンザル

西部林道での長期調査で明らかになったことの一つが、ダイナミックな社会変動です。1970年代の調査開始当初、調査対象の群れは個体数を次々に増加させ、群れの分裂が頻発しました。おそらく、この地域では、それまで行われていたサルの捕獲からの回復過程にあったのでしょう。ところが、1980年代の後半になると、調査対象の中で、個体数が減少する群れが現れ、ついには、最後に残ったメス2頭が隣接する群れに融合して消滅する事例が観察されました。母系社会であるニホンザルで群

れの融合が観察されたのは、これが初めてのことです。このような事例をあわせて少なくとも5例観察されています。屋久島海岸部では、個体数がいったんある程度より小さくなると、アカンボウがほとんど生まれなくなります。そのため、数が次第に減っていき、最後には消滅してしまうようです。個体数増加が頭打ちになると、群れと群れとの競合が起こって、小さい群れが数を減らし消滅することで、全体の個体数が一定に保たれているのでしょう。

屋久島の植物



ヒメカカラ

(サルトリイバラ(ユリ)科)

屋久島・奄美大島に分布するつる性の落葉小低木。屋久島では高地の明るい草むらや歩道沿いで見られる。葉は「かから」(サルトリイバラやサツマサンキライ)のように3脈が見えるが、直径1センチほどの大きさ。秋に直径5ミリほどの球形の実をつける。花期5〜6月、果期9〜10月。

屋久島生態系モニタリング



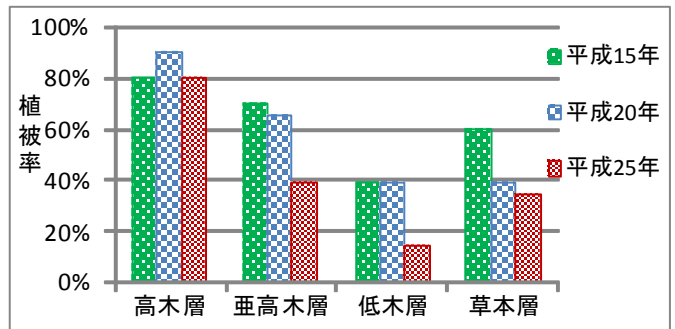
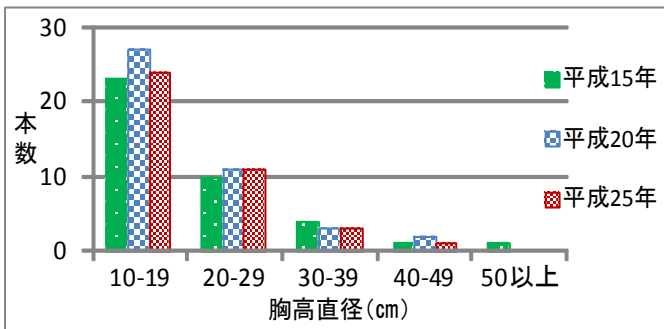
屋久島南部等の植生垂直分布調査（平成25年度）

●標高5㍍プロット（大川の滝風景林 [海岸林]）

[高木層] マテバシイ、ヤブツバキ、リュウキュウマメガキ、クスノキが多く、モクタチバナ、ヤマビワ、クロガネモチも生育。個体数は少ないがホルトノキ、タブノキ等も出現。**[亜高木層]** マテバシイが多く次いでヤブツバキ、モクタチバナ、イヌビワが多い。個体数は少ないがホルトノキ、ヤブニッケイ、スダジイ等も出現。**[低木層]** モクタチバナ、ヤブツバキが多く、マテバシイ、イヌビワ、シャリンバイが続き、個体数は少ないがクロキ、タイミンタチバナ等も生育。**[草本層]** ホソバカナワラビがやや多く、ヤブツバキ、マテバシイ、モクタチバナの稚樹が混じるが植被率は低下しつつある。

[胸高直径階別幹本数] 胸高直径 10-19 cmの本数が多少変化したが、旧小プロット内での全体では殆ど変化がなかった。（旧プロット 10×30㍍。新規小プロット（10×10㍍）を3点増設。）

[階層別植被率] 高木層は過年度（平成15年度及び20年度）と本年度で殆ど変わらなかったが、亜高木層、低木層、草本層については、経年的に植被率が低下している傾向が見られる。被圧による影響以外にヤクシカの影響も考えられる。



[調査結果の概要] 照葉樹が優占する広葉樹二次林の海岸林。前回調査時には、樹幹のうっ閉により林内が暗くなって草本層の植被率が減少したが、低木層はボチョウジが多く高木層の樹種の稚樹も多かった。しかし本年度ではボチョウジが殆ど見られなくなり、ヤクシカの採食圧の影響が考えられる。



巨樹・著名木 屋久杉

大和杉

縄文杉に次ぐ大きさの巨木で、窪地にあって風の影響をあまり受けないため樹高も高く木肌も美しい。ヤクスギランドから花之江河歩道を約2時間程歩いた歩道下にひっそりと立っています。

大和杉にはヤマグルマ、サクラツツジ、ヒカゲツツジ、アクシバモドキ、シキミ、マルバヤマシグレ、ナナカマド、ミヤマシキミ、ソヨゴ、カクレミノ、スギが着生しています。



- 樹高：34.9㍍
- 胸高周囲：10.2㍍
- 樹齢：推定3000～4000年
- 標高：1260㍍
- 場所：花之江河歩道沿い